

ひきこもり当事者によるピア活動を目的とした ひきこもりサポーター養成派遣事業：「堺市ユース・ピアサポーター」 養成派遣事業の取り組みについて

イワタ ミツヒロ
岩田 光宏*

目的 ひきこもり支援の裾野を広げるためにはひきこもりサポーター養成派遣事業を活用することが重要である。そこで堺市におけるひきこもりサポーター養成派遣事業の取り組みを報告し、3年間の活動報告から効果的な事業のあり方について検討した。

方法 堺市ではひきこもりサポーター養成派遣事業として、ひきこもりの集団支援段階に当事者のピアサポーターを活用することを目的とした「堺市ユース・ピアサポーター養成派遣事業」を実施した。2013年度から2015年度までの3年間に実施された養成講座とピアサポーターによる活動状況を分析した。

活動内容 ひきこもり相談の利用を経て社会参加活動を開始している者を対象に、グループワークの企画方法に関する講座など全4回の養成講座を3年間で3クール実施したところ、15人（男性11人、女性4人、平均年齢31.9歳、ひきこもり期間の平均76.5か月）が受講してピアサポーターとして登録した。その全員がピアサポーター活動を開始し、延べ453回の活動をした。ピアサポーターにより延べ30回のグループワークが企画され、延べ372人の利用者が得られ、ひきこもりの集団支援を充実させることができた。

結論 本報告の養成講座およびグループワークの企画というピアサポーター活動は、ピアサポーター自身の経験を活かせる、ひきこもり事例に対する間接的な支援であるなどの点から、ひきこもりのピアサポーターが取り組みやすいものであったと思われる。ピアサポーターによる支援によって集団支援が充実したと同時に、ピアサポートによる影響が生じ、ピアサポーター自身の主体性の回復にも繋がる取り組みであった。

Key words : ひきこもり, ピアサポート, グループ, ひきこもり地域支援センター, ひきこもりサポーター養成派遣事業

日本公衆衛生雑誌 2017; 64(12): 727-733. doi:10.11236/jph.64.12_727

I はじめに

自宅を主な生活の場とするひきこもり状態の若者は全国におよそ26万世帯に存在するとも、およそ70万人存在するとも言われ、我が国における精神保健、福祉、労働など多領域に渡る社会問題となっている。そのなかで厚生労働省は2009年度から、全国の都道府県および政令市にひきこもりに特化した第一次相談窓口としての役割を担う「ひきこもり地域支援センター」の設置を開始し、2016年12月までに68箇所が開設されている¹⁾。さらに同省は2013年度

から、「ひきこもりサポーター養成・派遣事業」を開始して、ひきこもり地域支援センターにおける事業の強化を図っている。ひきこもり支援の裾野を広げるためにはこの事業を活用することが重要であり、今後同事業を普及するためには効果的な事業モデルを示すことが必要である。

厚生労働省によると同事業は、「ひきこもりサポーター（ピアサポーターを含む）を養成し、養成されたサポーターを地域に派遣し訪問支援等を行うもの」とされており¹⁾、ひきこもりの当事者（および家族）がピアサポーターとなって、支援を必要とする家庭に訪問する活動が主に想定されている。しかし、ひきこもりの訪問支援の実際の場面では精神疾患の見極めなど高い専門性が求められるため²⁾、ピ

* 堺市こころの健康センター

責任著者連絡先：〒590-0808 堺市堺区旭ヶ丘中町4-3-1 堺市こころの健康センター 岩田光宏

ピアサポーターの活用には慎重を要する場合が多い。

ところで、ひきこもりの支援は段階的に進むと考えられており³⁾、家族支援を中心とする段階、ひきこもり本人の個別相談を中心とする段階の後に、集団支援を行う段階があり、そして社会参加の試行を支援する段階があるとされている。支援期間が長期に渡る場合が多くそれぞれの支援段階にマンパワーが必要となるため、家庭訪問だけでなく他の支援段階におけるひきこもりサポーターの効果的な活用方法を柔軟に検討することが重要である。

実際これまでに様々な対象をひきこもりサポーターとして養成し、多様な支援場面で活用した実践の報告がある。たとえば、家族連合会によるモデル事業^{4,5)}では2013年からの2年間で201人の家族や当事者をピアサポーターとして養成し、親の会での相談活動や居場所支援など様々な支援場面にサポーターの派遣を行った。また、複数のひきこもり地域支援センターにおける2012年と2013年のモデル事業の報告書^{6,7)}によると、大学生等を養成して家庭訪問等に活用した実践(横浜市)、当事者のピアサポーターを養成して同じく訪問支援等に活用した実践(広島県)、社会参加の試行段階の支援に対して地域の人材をサポーターとして活用するなどの実践(和歌山県)、さらには当事者のピアサポーターをひきこもりの啓発場面における体験談発表の語り部として活用した取り組み(浜松市)などが報告されている。

そして同報告書のなかで、堺市では2013年にひきこもりの集団支援段階に当事者のピアサポーターを活用することを目的とした養成講座の取り組みを報告した⁷⁾。我々はその後も同様の養成講座を継続し、養成されたピアサポーターを主に集団支援の企画運営活動に活用することでひきこもり支援を充実させることができた。本報告ではこの実践の3年間の活動をまとめ、ひきこもりサポーター養成派遣事業の効果的な実施方法およびひきこもり当事者のピアサポーター活動のあり方について考察した。

Ⅱ 方 法

1. フィールドの概要

堺市(政令指定都市)に置かれた精神保健福祉センター(以下、センター)を実践のフィールドとした。センターは2006年よりひきこもり専門相談を実施しており、2011年からはひきこもり地域支援センターを併設し、ひきこもりで悩む市民の相談に応じている。対象は中学卒業以降(上限なし)の本人または家族であり、受理事例に対して、担当職員(臨床心理技術者、保健師、精神保健福祉士)による継

続的な来所相談と、家族教室や本人向けグループワーク等のプログラムを提供した⁸⁾。なお、2015年度の相談延べ件数は4,760件であった。

2. 分析方法

センターにおいて2013年度から2015年度までの3年間に実施されたひきこもりサポーター(以下、サポーター)の養成講座とサポーター活動を分析対象とした。養成講座は2013年度のみ「堺市ユース・サポートセンター(ひきこもり地域支援センター児童期機能を有する機関)」との共催で実施し、以降はセンターが単独実施した。養成講座の実施状況をまとめ、サポーターとなった受講者の属性等を整理した。また、サポーター活動の実施状況をまとめ、活動回数を整理した。倫理的配慮としてセンター内での十分な検討の上、所属長の承認のもと分析を行った。サポーターとなったひきこもり当事者に対して、口頭で報告の趣旨を説明し了解を得た上で、書面で同意を得た。

Ⅲ 活 動 内 容

1. センターにおけるグループワークの取り組み

センターのひきこもり本人向けグループワーク(以下、GW)は、2006年度から実施しているが2009年度から独自の集団支援方式による特徴的な取り組みを行っている。その集団支援の企画方法は、「サカイ式すべらないグループワーク(通称SSG)」としてまとめられ、これまでに実践の詳細が報告されている^{9,10)}。それは居場所やデイケアのような定期的に実施される連続した活動ではなく、すべて期間限定のイベントの集合体として実施されている。2013年度から2015年度までの3年間には、スポーツ、調理、ゲームなど利用者同士が交流を行うGWや、参加者は聴いているだけでよい講座形式のGW、さらにボランティア体験や外部機関の見学をするGWなど、延べ298回のGWが実施され、延べ2,300人の利用があった。表1に「サカイ式すべらないグループワーク」によるGWの企画方法を示した。この手法によるGWは、ほとんどが単発のイベントなので、新たなGWを追加で実施することが容易にできる。そこでサポーター活動としてGWの企画活動を実施することとした。

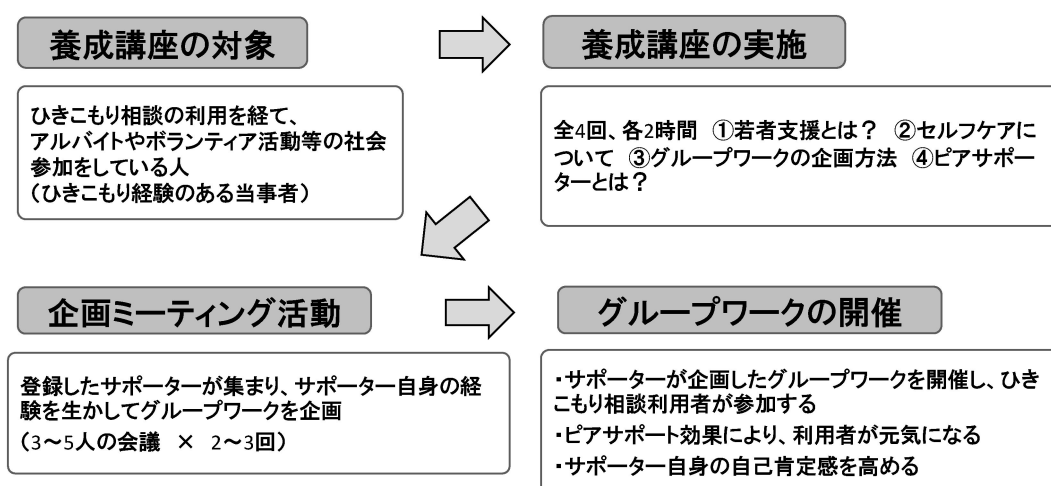
2. 養成講座とサポーター活動の概要

図1に「堺市ユース・ピアサポーター養成派遣事業」の概要を示した。養成講座を実施するにあたり、我々はサポーターの主な活動を、ひきこもり当事者によるひきこもり本人向けGWの企画活動に置いた。つまりサポーターとなった当事者が話し合いによりGWを企画、実施することでひきこもり

表1 「サカイ式すべらないグループワーク (SSG)」によるグループワークの企画方法

個別ニーズに応じた「テラーメイド」の企画	個別相談利用者それぞれのニーズに応じた GW を企画する。準備として個別相談担当者を対象に半年に1回程度、ニーズ調査を実施。調査では、個別相談担当者が担当する事例（GW未利用の事例含む）について、それぞれの興味関心や、どのような形式なら GW 利用が可能かを推測し自由記述で箇条書きにする（例：身体を動かしたい/ボランティアに興味がある/同性のみなら参加可、など）。それらのニーズを KJ 法により分類し、その結果に従い GW の内容、回数を決める
「一期一会」方式	すべて期間限定のイベントとする。回数は単発を基本に、連続的に実施する場合は3～6回程度の企画とする。イベントごとに内容、時間、場所を示した案内チラシを作成。案内チラシは掲示するなどの周知方法はとらず、個別相談担当者が来談時に本人へ直接渡す。その際、企画されたすべての GW を案内せず、事例のニーズを考慮して案内するものを選択する
「安心してすべれる」企画	多くの参加者が交流できるレクリエーションの企画だけでなく、交流が生じない講座形式や少人数に限定したものなど「すべっている」かのように見える（賑わいが無いという点で失敗かのように思える）GW もあえて企画する。講座形式では、スクール形式に机と椅子を配置し、参加者同士が向かい合わずに過ごす。円座で会話が盛り上がる時間にしないことにより、そうした場面が苦手な事例も集団に入りやすくなることを意図

図1 「堺市ユース・ピアサポーター養成派遣事業」の概要



の集団支援の強化に資することを目的とした。そこで、養成講座の対象はセンターのひきこもり相談利用者で、個別相談とGWの利用を経て、何らかの社会参加活動（アルバイト、就職活動、定期的なボランティア活動等）をすでに開始している者とした。対象者に対して相談担当者が個別にサポーター活動と養成講座の説明を行い、活動への興味を示した者が受講した。

養成講座は「堺市ユース・ピアサポーター養成講座」という名称で実施し、GWの企画方法に関する講座などを4回に分けて実施した¹¹⁾。具体的には各回2時間とし、第1回は「若者サポートについて」というテーマで、ひきこもり支援を必要とする若者の背景と支援の考え方について説明した。第2回は、サポーター活動に取り組む自分自身のケアにつ

いて注意を向けることを目的として、「セルフケアについて」というテーマで、ストレスマネジメントについての講義や演習を行った。第3回は「GWの企画方法」というテーマで、実際に参加者同士で話し合いを行い、短時間のレクリエーションを企画実施する演習等を実施した。第4回は「ピアサポートについて」というテーマで、地域でひきこもりのピアサポートを実践している講師を招聘し、体験談を含めた講義を行い、最後に修了式として一人ずつ修了証書を渡した。なお、講座全体を通じて、「ひきこもり」という単語は極力使わず、座学だけでなく講座のなかで参加者同士が交流する時間を多く設けるようにした。

講座後のサポーター活動としては、登録したサポーターが集まり、GWの企画を行う「企画ミー

ディング活動」を実施した。そこでは3人から5人のサポーターが2, 3回のミーティングを重ねてGWを企画した。具体的には、まずそれぞれがやってみたいGWやこれまで参加してよかったGWなどの意見を出し合い、それらの意見から実際に行うGWの内容を細かく決めた。内容が決まると、案内チラシを作成したり、GW実施日の役割分担を検討したり準備を行った。GWの実施当日は、センターのひきこもり相談利用者が参加し、サポーターは事前に決めた役割を担った。GW実施当日のサポーターの具体的な役割は、利用者に声かけを行うなど直接的な対人支援ではなく、GWで使う道具の準備など間接的な支援が主なものであった。なお、企画ミーティングやGWの運営補助のサポーター活動に対して、1回当たり定められた活動費がサポーターに支払われた。

3. 養成講座受講者（サポーター）の属性等

3年間で養成講座を3クール実施し、ひきこもり経験のある当事者15人が受講した。受講者全員が修了してサポーターとして登録した。2013年度の修了者は6人（男性5人、女性1人）、2014年度は5人（男性3人、女性2人）、2015年度は4人（男性3人、女性1人）であった。受講者（サポーター）15人の性別は、男性が11人（73.3%）、女性が4人（26.7%）であった。養成講座受講時の平均年齢は、31.9歳（最小値21歳、最大値45歳、標準偏差8.0）であった。ひきこもり開始年齢の平均は、21.3歳（最小値12、最大値32歳、標準偏差6.5）で、相談受理時までのひきこもり期間の平均は76.5か月（最小値2、最大値216か月、標準偏差75.0）であった。相談受理から養成講座受講までの相談利用期間（家族のみの相談利用期間も含む）は、平均4.0年（最

小値1、最大値7年、標準偏差2.4）であった。

4. サポーター活動の成果

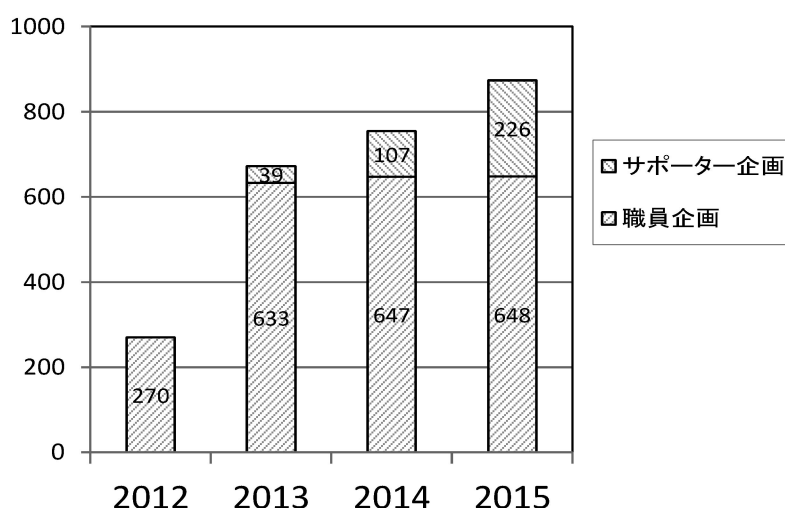
養成講座を修了しサポーターとして登録された15人全員が活動に参加し、延べ453回の活動を行った。うち414回がGWの企画および実施に係る活動であり、その他は一部のサポーターが体験談発表や個別相談の補助活動を行った。

サポーターが企画したGWは延べ30回で、2013年度に2回、2014年度に8回、2015年度に20回実施された。これらのGWの利用者は、延べ372人であり、1回あたりの平均参加者は12.4人（最小値7人、最大値24人、標準偏差3.4）であった。具体的な内容は、「調理した団子を食べながらクイズ大会をするイベント」や「電車で外出してまち歩きをするイベント」などであり、内容の特徴として参加者同士の交流が生じるものが多かった。また、企画会議でサポーターが様々な意見を出し合うことにより、単純に調理をするイベントではなく調理した後に食べながらクイズ大会をするというように、複数のアイデアを生かした企画になることが多かった。

なお、同時期にセンター職員によって企画されたGWは268回（2013年度に78回、2014年度に99回、2015年度に91回）で、利用者は延べ1,928人（1回あたりの平均7.2人）であった。職員企画GWの具体的な内容は「講座形式で話を聴くだけのイベント」等の交流がないGWや、「ボランティア体験」や「ハローワーク見学」等の社会参加に繋げるものなどであった。サポーター企画GWに比べると、ひとつのアイデアのみを企画にしたものが多かった。

ひきこもりGWの利用者延べ数を年度別にサポーター企画分と職員企画分にクロス集計して図2に示した。職員企画のGW利用者は2013年度633人、

図2 ひきこもりグループワークの利用者延べ数



2014年度647人, 2015年度648人とはほぼ増減が見られないのに対して, サポーター企画のGW 利用者は2013年度39人, 2014年度107人, 2015年度226人と増加傾向にあることが示された。

Ⅳ 考 察

1. ひきこもり当事者が取り組みやすいピアサポーター活動

本報告におけるひきこもりサポーター養成講座では, 受講したひきこもり当事者15人全員が講座を修了し, サポーターとして活動を行うことができた。このため, 本報告の養成講座およびGW の企画というサポーター活動は, ひきこもりのピアサポーターが取り組みやすいものであったと思われる。以下その理由として考えられる4点について考察する。

ひとつは, サポーター自身の経験を活かせる活動であったことが挙げられる。養成講座の対象者は, センターの相談利用者でGW の利用を経て社会参加を行っている者に限定されていた。このため受講者全員にセンターGW の利用経験があり, その経験を活かしてGW の企画を行うことができたため, 意欲的に活動に取り組めたと推測できる。

次に, GW の企画活動がひきこもり事例に対する間接的な支援であった点が挙げられる。これまで, ピアサポーターをひきこもりの集団支援で活用した報告¹²⁾もあるが, それは主にグループ内で利用者の話し相手になるなどサブスタッフのような役割としての活用であった。集団支援のなかでファシリテーターをする等の役割が与えられるのであれば, 家庭訪問等の個別相談と同じく, ひきこもりの当事者に直接的な対人支援を行うことになる。一方, 我々の実践におけるGW の企画活動は, GW の内容を考えて案内チラシを作成する等の準備が中心であり, ひきこもり支援に間接的に携わる役割であった。直接的な支援の役割が与えられないことで, 比較的安心して活動に参加できたと推測できる。

さらに, 企画するGW がすべて単発のイベント形式のため, サポーターの役割と責任が短い期間に区切られた活動であった点が挙げられる。センターの集団支援(SSG方式)はすべて期間限定のGW の集合体であったため, サポーターが企画するGW もすべて単発のイベントであった。もし連続的に行われる集団支援に関わるのなら役割と責任は継続していくものと思われるが, 本実践におけるGW 企画実施に伴う役割と責任はそのイベント限りとなる。サポーターにとって役割と責任が短い期間に区切られていることが, 活動を始めやすい一因であったと推測できる。

最後に, サポーター活動はあくまでボランティア活動の位置づけであったが, サポーターに対して実費負担程度の謝礼金が支払われた点が挙げられる。本実践におけるサポーターの対象者は, 何らかの社会参加を果たしているが長時間の就労はしていない者であった。つまり自分ができる範囲内であれば, 社会参加をしたい意欲がある者だったと言える。その活動に対してわずかであっても謝礼が生じるのは, 彼らにとって適度な中間的就労のような活動として取り組みやすかったものと思われる。

2. ピアサポーター活動によるひきこもり支援への影響

サポーターによって延べ30回のGW が企画, 実施されたことで, センターにおけるひきこもりの集団支援はより一層充実したと言える。本実践により支援の量的な充実をもたらすことができたのは, センターの集団支援(SSG方式)が期間限定のGW の集合体であったことが大きい。サポーターが単発のイベント型GW を企画することがそのまま全体の集団支援回数の増加となった。

次に, サポーター企画によるGW 1回当たりの平均利用者は12.4人であり, 職員企画(7.2人)に比べて多かった。より多くの利用者が得られたことから, サポーター活動が集団支援を充実させたと言える。サポーター企画GW は, 4人前後のサポーターがミーティングで意見を出し合って決めた。サポーターは自らの経験からもう一度やりたい活動や, これまでのGW になかったがやってみたい活動のアイデアを持っていることが多い。それらの意見をまとめていくなかで, たとえば「調理をしてからクイズ大会をする」など, 複数のアイデアを取り入れた内容に決まることが多かった。この例では「調理に参加したい者」と「クイズ大会に参加したい者」の両者の参加が可能となるように, ひとつの活動のみを目的とする職員企画GW よりも多くの利用者が得られることが期待できる。こうした背景からサポーター企画GW の利用者が比較的多くなったと推測できる。

さらにサポーターの活動は, 上記のようないわば量的な支援の充実だけでなく, ピアサポートの影響を生じさせ, 質的な充実をももたらしたと考えられる。サポーターが企画したGW は, 参加者同士の交流を促す内容が多く, 集団支援段階に入ったばかりのひきこもり相談利用者と社会参加段階にあるサポーターが関わる機会となっていた。GW の利用者は, サポーターが黒子のようにGW の準備などの役割を担っている姿を垣間見る一方で, サポーターと一緒に調理やゲームを楽しむことができた。

ひきこもり状態の事例がすでに社会参加を開始している当事者と関わることで、具体的な社会参加のイメージを持ちやすくなるという影響を受けている可能性があり、これは職員による支援では提供しにくいピアサポートであると言える。

また、サポーターによる企画ミーティング活動自体が、サポーターにとっての集団支援になっていることも推測できる。上記のようにミーティングでお互いの意見を出し合って統合していくプロセスは、自らの思いや気持ちを伝えた上で相手を尊重するコミュニケーションであると言える。お互いの存在を認め合うことができるミーティング活動の時間は、社会参加を開始したひきこもり当事者同士の支え合いの場となっていると考えられる。

本報告におけるサポーター活動は、センターの支援の強化に活用するという支援者側の目的が強かった。サポーター側の目的としても、担当支援者に促されて中間的就労のような意識で活動を開始した者が多く、「自分のひきこもり体験を生かしたい」という意識を強く持って主体的にピアサポート活動を始めた者は多くなかったと思われる。しかしGWの企画活動を継続するなか、やがて自らのひきこもり体験を語る体験談発表の活動や、個別相談の補助活動といったピアサポート活動についても、自発的に希望して取り組み始めた者が増えていった。ひきこもりからの回復は、本人の主体性の回復過程でありそのためには当事者による集団の自治活動が重要であるという指摘がある¹³⁾。本実践は当事者にとって取り組みやすい活動であったため、サポーター活動を入り口として、より主体的なピア活動に取り組むきっかけとなる可能性が示された。

3. 本実践の他地域での再現性について

本実践のフィールドであるセンターの集団支援のしくみ(期間限定のGWの集合体)が、サポーターによるGW企画活動に馴染み易かったと考えられる。他地域では異なる方式の集団支援が行われていることも考えられるため、他自治体での本実践の導入に際しては、集団支援のあり方を含めて検討が必要かもしれない。一方、いわゆるデイケアや居場所活動など連続的な集団支援においても、イベント型のプログラムが企画される場合も少なくない。したがって、ひきこもり養成派遣事業として、本実践のような集団支援の企画を行うピアサポーターを養成することは、地域におけるひきこもり支援の充実に寄与できる可能性がある。

また本実践のフィールドであるひきこもり地域支援センターは、精神保健福祉センターに併設されていた。精神保健福祉センターは地域の精神保健福祉

に関する普及啓発や組織育成などの役割を担っている。本実践の継続によりサポーターが増えていくことで、地域における社会資源の強化にも繋がると考えられるため、精神保健福祉センターがこうした活動を積極的に行う意義も大きいと言える。

V おわりに

本報告では、ひきこもりのピアサポーターの養成目的をひきこもり当事者への直接的な支援ではなく、ひとまず集団支援活動の企画を通じた間接的な関与に置くことで、多くのサポーターが活動できることに繋がり、ひきこもり支援が充実することを示した。今後はサポーターの活動範囲をセンター外に広げ、市内各区に拠点を置くなど地域にひきこもりの集団支援場面を増やし、より身近にGWを利用できるしくみ作りに取り組んでいきたい。また、本実践の効果についての検証は、今後の活動を積み重ねると同時に、サポーターにインタビュー調査を実施するなど詳細な分析が必要であり今後の課題である。

本報告は、第75回日本公衆衛生学会総会における発表を基に、加筆して作成しました。発表に関してお世話になった諸先生方に感謝いたします。なお、本報告に開示すべきCOI状態はありません。

(受付 2017. 5.18)
(採用 2017.10. 2)

文 献

- 1) 厚生労働省. ひきこもり対策推進事業. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/hikikomori/ (2017年5月15日アクセス可能).
- 2) 近藤直司, 境 泉洋, 石川信一, 他. 地域精神保健・児童福祉領域におけるひきこもりケースへの訪問支援. 精神神経学雑誌 2008; 110(7): 536-545.
- 3) 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(H19—こころ—一般-010)」(研究代表者 齋藤万比古). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. 2010. <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12000000-Shakaiengokyoku-Shakai/0000147789.pdf> (2017年10月3日アクセス可能).
- 4) 全国引きこもりKHJ親の会(家族会連合会). 平成25年度セーフティネット支援対策等事業補助金 社会福祉推進事業 全国各地の親の会における「ひきこもりピアサポーター」養成研修派遣に関するモデル事業 報告書. 2014. <http://www.khj-h.com/pdf/13peer-report.pdf> (2017年10月3日アクセス可能).
- 5) 全国引きこもりKHJ親の会(家族会連合会). 平

- 成26年度セーフティネット支援対策等事業補助金 社会福祉推進事業 全国各地の親の会におけるひきこもりピアサポーター養成研修派遣に関する調査研究事業 報告書. 2015. <http://www.khj-h.com/pdf/14peer-report.pdf> (2017年10月3日アクセス可能).
- 6) 神戸オレンジの会ひきこもり地域支援センター全国連絡協議会. 平成24年度セーフティネット支援対策等事業費補助金 社会福祉推進事業 地域におけるひきこもり支援に関する調査・研究事業 報告書. 2013. <http://www.kobe111.jp/image/jigyohoukokusho.pdf> (2017年10月3日アクセス可能).
- 7) 神戸オレンジの会ひきこもり地域支援センター全国連絡協議会. 平成25年度セーフティネット支援対策等事業費補助金 社会福祉推進事業 地域におけるひきこもり支援に関する実践的研究事業 報告書. 2014. <http://www.kobe111.jp/image/h25houkokusho.pdf> (2017年10月3日アクセス可能).
- 8) 厚生労働省アフターサービス推進室. ひきこもり地域支援センター設置運営事業に関する調査 報告書. 2016. <http://www.mhlw.go.jp/iken/after-service-vol22.html> (2017年5月15日アクセス可能).
- 9) 岩田光宏, 真志田直希, 金谷尚佳, 他. ひきこもりの個別相談段階から集団支援段階へ繋げる方法: グループワークの企画方法と効果. 臨床精神医学 2016; 45(9): 1197-1205.
- 10) 岩田光宏, 真志田直希, 金谷尚佳, 他. ひきこもりの社会参加に繋げる集団支援の方法: サカイ式すべらないグループワークの実践と転帰分析. 精神科治療学 2017; 32(4): 541-547.
- 11) 岩田光宏, 真志田直希, 横治絵理奈, 他. ひきこもりの集団支援での活用を目的としたひきこもりサポーター養成講座の取り組み: 「堺市ユース・ピアサポーター養成講座」の実践から. 堺市こころの健康センター研究紀要 2016; 8: 1-5.
- 12) 成瀬榮子. ピアはどんな場所で, どんな活躍をしているか ピアによるひきこもり支援. 精神科臨床サービス 2013; 13(1): 94-98.
- 13) 金城清弘, 山本耕平, 編. 助走, ひきこもりから: 共同作業所エルシティオのいま. 京都: クリエイツかもがわ. 2003.
-